

第7編 人物編 郷土の詩人ふたり

第1章 竹内てるよ

㊦ 7101 在りし日の竹内てるよ



戦後、竹内てるよという詩人が猿橋に住んでいたことを知っている人は少なくなった。

竹内てるよは昭和期の詩人、小説家で明治37年（1904）北海道で生まれた。小学校3年、10才のとき東京へ出て日本高等女学校に進学したが、卒業間近で肺結核療養のため中退、その後、婦人記者生活となって一家の生活を支えた。

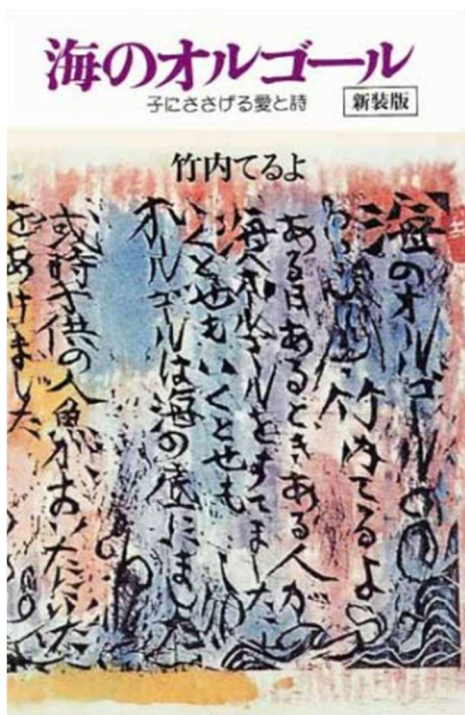
20歳の春結婚、その後長男徹也が生まれたが、昭和2年春、脊椎カリエスの不治の病と診断され、婚家を追われるように離婚された。徹也は里子に出された。

以後、病苦と貧困に耐えながら詩作を続けた。関東大震災の時、出版社の事務員だったが東京の印刷会社が操業停止のため、大阪の印刷屋に依頼すべく原稿を持って中央線経由で大阪へ向かった。東海道線が運休していたからだ。病身をおしての旅行で、山梨へ入った頃から旅を続ける体力がなくなり、

途中下車した猿橋で大黒屋旅館に泊った。

戦後、穂高に住む友人を訪ねての旅行の途中、同じような理由から猿橋で下り大黒屋に行ったところ、女将は代がわりしていた。この若い女将と仲良くなり、その後も何回か泊りに行ったという。

㊦ 7102 著書「海のオルゴール」



てるよは、かねてから東京を引上げ環境の良いところに住みたいと思っていたので、大黒屋の若女将に相談したところ、町営住宅を紹介してくれたとの事である。その町営住宅は伊良原の入口、舟久保にあった。

猿橋に住んでいた間も著作活動を続け、昭和57年（1977）に「海のオルゴール」を上梓した。

平成14年（2002）、スイスのバーゼルで開催された交際児童図書評議会（IBBY）の創立50周年記念大会で、当時的美智子皇后のスピーチの中で、竹内てるよの「頬」が引用されたことからテレビでも紹介された。

翌年6月には自伝ともいえる「海のオルゴール」がドラマ化されて6月28日にフジテレビで放送された。

第2章 吉川行雄

図7201 詩人：吉川行雄



詩人吉川行雄は猿橋活版所の創業者吉川実治の長男として明治40年（1907）2月19日に生まれた。

大正8年（1919）、猿橋尋常小学校を卒業、大原高等小学校に進み大正10年（1921）に卒業した。この卒業式で卒業生総代として答辞を読むため壇上に上がろうとして転び、それがもとで歩けなくなったという。ポリオという急性ウィルス性疾患だったようだ。14才の年である。

それ以降は活版所、書店の中で多くの時間を過ごすようになり、昼間は家業の事務作業を受持ち夜は読書にあてた。

小学校時代から詩・童謡の創作を始め、16才の大正12年（1923）に「明日の教育」8月号に初めて西条八十の撰で童謡3篇が掲載された。

その後、色々な文芸誌に投稿し、大正13年（1924）には山梨県教育会北都留第二支部の雑誌「銀の泉」発刊に尽力した。

昭和2年（1927）、童謡集「郭公啼くころ」を出版。昭和4年二冊目の童謡集「月の夜の木の芽だち」を出版した。北原白秋の「赤い鳥」、野口雨情の「金の船」、西城八十の「童話」などの文芸誌が相次いで発刊されていた時代、行雄はこれらの文芸誌にも投稿し、更に「乳樹」には北原白秋らとともに同人として参加している。

歩行が不自由だった行雄は家業を弟の秀雄に任せ、文芸活動に没頭した。

昭和11年（1936）、29才の年、自身が主宰しての雑誌「ロビン」の発刊にとりかかった。知人・友人に参加を求め9月25日に第1冊を発刊した。

図7202 月夜の詩人（平成19年発刊）



第2冊は同年12月に発刊の予定だったが、翌年の2月1日にすれ込んだ。行雄の病状が悪化したためだ。

第3冊・第4冊の特集の構想も出来ており、第3冊は4月刊行と公表していたが、行雄の身体がその発刊を許さなかった。

昭和12年5月9日午後6時、30才という短い人生の幕を閉じた。

葬儀は2日後に行われた。吉川家から心月寺まで長い葬列が続いた。（第3編第4章参照）

左の「月夜の詩人」は、行雄の残した作品と日記、手紙と葉書をもとに矢崎節夫が綴った詩人吉川行雄の生涯である。